一橋大学における西洋古典資料保存の取組 ―ただ古いだけではない―

床井啓太郎
一橋大学社会科学古典資料センター専門助手

１．一橋大学社会科学古典資料センターについて

一橋大学社会科学古典資料センター（以下センター）は，1850 年以前に西洋で出版された古典資料を専門に収集する研究図書館として，1978 年に附属図書館から分離して設立された。所蔵する約 8 万点の資料はすべて貴重書に指定されており，この中にはカール・メンガー，オットー・フォン・ギールケ，左右田喜一郎などの研究者の旧蔵書や，フランクリン文庫，ベルンシュタイン＝スヴァーリン文庫など，世界的に著名かつ重要なコレクションが含まれる。

センターは，センター長，センター教授，専門助手 2 名，図書館職員 2 名（1 名は附属図書館係長を兼務），保存修復工房（以下工房）スタッフ 4 名からなる比較的小規模の組織である。所属する教員が所蔵資料について調査研究を行う研究機関であるのと同時に，劣化等から利用の困難な資料を除き，基本的に所蔵するすべての資料を学内外の利用者の利用に供する図書館でもある。

また，西洋古典資料の研究法や書誌学，整理・保存等についての講習会を 30 年以上にわたって開催しており，全国の図書館関係者が西洋古典資料について学ぶ研修機関としての役割も果たしている。

２．センターの保存活動

センターは，出版から数百年の時を経て常に劣化の脅威に晒されている古典資料を，今後も長期にわたって利用可能な状態に保つため，資料の保存対策に特に力を入れてきた。センターで現在行っている保存活動の原型は，1993 年より開始されたメンガー文庫関連の事業を通じて形作られたものである。メンガー文庫事業は，文庫に含まれる約 2 万点の資料全点について，マイクロフィルム化，旧版目録の全面改訂，保存対策を同時に進める総合事業であった。資料への保存対策は，撮影の過程で傷んだ資料への個別の対処に留まらず，資料全点について調査，予防的な保存処置を施すことで，資料群全体の保存状態を維持する方針をとった。この方針は，文庫単位で資料を悉皆的に処置し，最終的には所蔵資料全点の調査・保存対策を目指すセンターの中長期保存計画へとつながった。また，資料の歴史性を尊重して製本構造等を安易に変更しないこと，不可逆的な処置を避けること，予防的な保存対策を重視すること，利用を前提とした保存を行うことなどの基本方針も，メンガー文庫事業を進めるなかで徐々に形作られた。

保存対策の実作業は，メンガー文庫事業に際して 1995 年にセンター内に設置された工房を中心に行っている。工房は，国内の大学で唯一の西洋古典資料の保存に特化した施設で，現在 4 名の専門スタッフが作業にあたっている。工房では中長期保存計画に基づいて蔵書の保存対策を進めているほか，新規受け入れ資料や，利用に伴う破損資料の処置も行っている。蔵書の保存対策については，2015 年現在で約 6 万 3 千点の処置を完了したところである。

保存処置の対象資料は，まず専用の冷凍庫で低温処置を施される。－40℃の庫内に 1 週間置くことで殺虫し，書庫内に資料を食害する加害虫を持ち込まないようにすることが目的である。その後一点一点状態を調査し，サイズや素材，製本構造，劣化状態等を詳細に保存カルテに記録する。調査結果によって保存修復の方針が決定されるほか，集積された記録は，資料群全体の性質や傾向を知るための基礎データともなる。破損資料は和紙としょうふ糊を用いて修理し，資料の状態に応じて簡易的な再製本，保革作業も行う。そのままで形態の保持が困難な資料や破損しやすい資料は，保存容器を作成して保護する。その他，書庫内の保存環境整備も工房の重要な任務のひとつである。

３．古典資料を保存するということ

近年，特に大学図書館において運営費や職員数の漸減が続くなか，資料保存をめぐる状況は厳しさを増している。西洋古典資料の保存もその例外ではなく，単に「古くて貴重だから」というだけでは，保存計画を推進するための予算等を確保できないのが実情である。

また，デジタル時代における学問研究の新たなあり方を模索するデジタル・ヒューマニティーズなどの方法論によって，デジタル媒体を通じた西洋古典資料のテキス

ト分析等が今後さらに盛んになっていくことが予想されるなか，デジタル化への対応と並んで，資料原本の保存を変わらず続けていくことの意義を，これまで以上に丁寧に示していく必要が生じるだろう。

古典資料は，過去の学問や思想を現代に伝える貴重な原典であるのと同時に,「もの」としての資料それ自体が，出版から数百年の時を経て，歴史の刻印を帯びた文化遺産である。例えば，センターで所蔵する『マグナ・カルタ』写本が，1300 年代のイギリスで作成されたと推測し得るのは、ロマネスク後期様式の製本構造と樫の木のバインドが 700 年の時を越えて保存されていたためであり，資料の製本構造や素材，印刷などの要素は，テキストのデジタル画像だけでは知り得ない様々な情報を常に我々に与えてくれる。センターでは資料原本を,「もの」に由来する情報を集積した固有の情報源として，また種々の媒体を通じた資料の利用が進むなか常に立ち返るべき原点として位置付け，原本の構造，素材をできる限り損なわない形で保存処置を進めている。

４．今後の保存活動

2016 年度からの新たな試みとして,「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」を 3 ヵ年の計画で開始した。この事業は（1）西洋古典資料の保存について中核的な役割を果たす人材を育成する実務研修事業,（2）所蔵資料の保存修復事業,（3）全国の大学等研究機関における西洋古典資料の所蔵・保存状況の実態調査を同時並行的に進めることで，国内における西洋古典資料の保存水準の全体的な底上げを目指すものである。

実務研修事業は,他機関から研修生を年間数名ずつ(同時期には 1 名のみ）受け入れ，1 か月から最大半年の長期にわたって集中的に研修を行うことで，保存修復の技術習得のみならず，資料の保存計画や保存環境整備の立案，またそのための判断ができる人材の育成を目指す。研修修了後は所属機関に戻った研修生を中心に，さらにそれぞれの地域で講習会等を通じて人材育成を行い，西洋古典資料の保存のためのネットワークを全国的に構築していきたいと考えている。これまでの実績として，国立国会図書館および大学図書館から 3 名の研修生を受け入れたほか，2016 年度中にさらに 1 機関から研修生を受け入れる予定である。

所蔵資料の保存修復事業は，これまでセンターが行ってきた保存対策を引き継ぎつつ，新たに今後 3 年間で資料 4 千点の調査，保存対策を行う。

実態調査は，これまで必ずしも明らかになっていなかった西洋古典資料の所蔵状況，保存状況を全国的に調査し，今後保存対策を進めていく上での基礎データを得ることが目的である。

センターでは過去 20 年，自館の事業を通じて西洋古典資料の保存についての知識や経験を蓄積してきたが，本事業を契機として，同じ問題関心をもつ人々とともに歩む，新たな協働の 20 年の一歩を踏み出したいと考えている。